

刊行にあたって

筆者は常々、歯科衛生士業務における「聖書」になるような書籍が必要であると考えていた。歯科衛生士は、基本的に予防業務を担当する。医療全般にいえることだが、「予防」は「治療」よりも難しい場合が多く、問題が起きた場合に歯科衛生士が責められることも少なくない。予防には高度な知識と経験が必須であり、そうした知識がない状態で予防を行うのは非常に危険である。そこで、歯科衛生士業務を解説すべく、筆を執ることにした。

なお、歯科衛生士業務については、歯科衛生士が知る前に、歯科医師こそ知るべきであると強く信じている。顕微鏡（マイクロスコープ）を医院に導入し、本気で顕微鏡を使ったメンテナンスをさせたいと願うのであれば、院長こそ真っ先に本書を読み、内容を理解する必要があるだろう。

いうまでもなく、本書で解説する内容は、顕微鏡の使用を前提にしている。そして、筆者が開発し、実践している直視の顕微鏡応用テクニック「スリーステップ秋山メソッド」を応用したものである。本書のなかでも「スリーステップ秋山メソッド」の概要を述べているが、より基本的な部分から理解したい場合は、前作『スリーステップ秋山メソッド BASIC 最低倍率でも大きなメリットがある顕微鏡テクニック』を読むことを強く推奨する。スリーステップ秋山メソッドは、“新しい”概念に基づいたテクニックであり、世界レベルの、非常に高い精度の歯科治療を実現できる。

筆者は歯科医師であるが、同時に顕微鏡を駆使した歯科衛生士業務にも30年以上従事している。「職業・歯科衛生士」と名乗ってよいほど、日々の診療における歯科衛生士業務の割合は高い。当然、治療が必要になれば歯内療法・補綴・保存・歯周病・インプラント・全顎の歯列矯正などすべての治療を顕微鏡下で行っている。歯科医療すべての分野を顕微鏡下で治療できる、非常に稀な歯科医師といえる。

本書の執筆にあたって、自身の歯科衛生士としての臨床成績を検証したところ、無作為に選んだ30名のメンテナンス患者（平均メンテナンス期間24年）において、知覚過敏ゼロ、歯周病再発ゼロ、抜歯数4本であった。筆者のメンテナンス患者は、その人生において不快な状況は起きず、ほとんど歯を失わないという結論になった。筆者の歯科衛生士としてのスキルは世界最高水準だと自負しているが、臨床現場でトラブルが起きないわけではない。トラブルが起きたとしても、そのほとんどを解決しているので歯が保存されているのである。本書で述べるノウハウを身につければ、筆者のように、トラブルを回避できるだろう。

一般的に多くの教科書の解説は、ピンポイント的なものがほとんどで、エビデンス論文の羅列だとその本質が見えてこない。つまり、点が線にならないと歯周病やカリエスの病態について理解できない。理解できなければ効率的な予防方法もわからない。そこで本書は、エビデンスベースで点を繋げて線にすることですべて理解できるような解説を心がけている。

本書がすべての歯科医療従事者にとっての福音になることを願っている。

2025年3月

秋山勝彦

秋山の歯科衛生士としての成績のリリース

本書の執筆にあたって、筆者の歯科衛生士としての技術を客観的に検証した。無作為にメンテナンス患者30人を選び、以下のようなリリースを行った。

●リリース内容

1	30人の平均年齢
2	30人のメンテナンス期間の合計
3	1人あたりの平均メンテナンス期間
4	30人の治療後のメンテナンス期間中に抜歯された歯の総数
5	1年間における1人あたりの平均抜歯数
6	メンテナンス期間中に1本の歯を失うまでにかかる年数
7	知覚過敏は存在するか？
8	歯周病の再発がどのくらいあるか？

リリース結果を以下に挙げる。

●リリース結果

1	30人の平均年齢	約60歳
2	30人のメンテナンス期間の合計	712年
3	1人あたりの平均メンテナンス期間	約24年
4	30人の治療後のメンテナンス期間中に抜歯された歯の総数	4本
5	1年間における1人あたりの平均抜歯数	約0.0056本
6	メンテナンス期間中に1本の歯を失うまでにかかる年数	178年
7	知覚過敏は存在するか？	ゼロ
8	歯周病の再発がどのくらいあるか？	ゼロ

【結論】

筆者の歯科衛生士としての技術は考えられないほど良好な結果を示した。

メンテナンス期間中に1本の歯を失うまでにかかる年数が「178年」という驚異的な成績は、筆者のメンテナンス患者はその人生においてほとんど歯を失わないことを意味する。

このようなメンテナンスを実現するためのノウハウのすべてが記された本書の内容は、歯科衛生士のみならず、歯科医師にも非常に有効であることが証明される結果となった。